

# Haiku について

## 芭蕉とイギリス・ロマン派

斉藤 隆文

約10か月あまり、イギリスのケンブリッジに滞在する機会があった。短期では気が付かないさまざまな事を見聞きしたが、中でも印象に残っていることの1つは日本文化の影響が少なからず見られたことである。日本料理店もかなりあるしカラオケなども目にするようになった。やや驚いたのはテレビで「ポケモン」というマンガが大人気なのを知ったことであった。イギリスのような保守的なところでサブカルチャーとはいえ、こうした日本文化の一端が受け入れられているのはおもしろいことだと思う。

不思議なのはこうした典型的な日本マンガがどうして世界的に人気を呼ぶようになったのかということである。アメリカのコミックや映画に見られるような英雄も登場しないし、明確な善と悪との対決があるわけでもない。その意味では極めて日本的なあいまいさをもったストーリーのように思える。しかし反面超人的な英雄だけが活躍する物語ではなく、見ている子供がだれでも参加できるような気持ちになる物語というのが新鮮なのかもしれない。また20世紀は善と悪(キリスト教的に言えば神と悪魔)とに分かれて戦った戦争の世紀であったが、そういう神話に基づく戦いに人々が次第に行き詰まりを感じてきたためかもしれない。あるいは *Time* で原作者が言っているように、ポケモンのモデルが昆虫やら植物だということだから、もしかすると最近の自然保護やエコロジー問題への関心とどこか通底するものがあるのではないかとも思う。

海外でこうした日本文化の活躍が見られる一方、最近インターネットなどで時々見かけるのが Haiku である。俳句は20世紀初頭のイマジズム運動に少なからぬ影響を与えただけでなく、インターネット上のサイトを見ると、今でも多くの愛好家が海外にいることがわかる。そこには芭蕉その他の俳人についての評論や翻訳、あるいは自身で作った Haiku な

どが載せられている。アメリカのサイトが一番多いようであるが、イギリスやブラジル、ノルウェーなどのサイトも見られる。Haiku (俳句)がいまだに日本のみならず世界的に愛好されているのは、それが他に例をみない特徴を備えているためだといえよう。以下では Haiku (俳句)について少し考えてみたい。

俳句の英訳にはいくつか種類があるが、ペンギンで出ている *The Narrow Road to the Deep North* trans. Nobuyuki Yuasa (Penguin Books, 1966) が広く読まれてきたのではないかと思われる。この本は日本人の手に成るもので、訳者は英米人に俳句を理解してもらうためにかなりのくふうをしている。例えば

あらたふと青葉若葉の日の光  
は次のように訳されている。

It was with awe  
That I beheld  
Fresh leaves, green leaves,  
Bright in the sun. (p.100)

この英訳には原句に見られない特徴が付け加えられている。まず行数が4行になっているが、これは俳句が非常に切り詰められた形であるため、英語に直すときにはどうしても長くなるという傾向があるためであろう。さらに原句にはない 'I beheld' が加えられている。英語では主語述語のない文章はまれなため、英語のスタイルに合わせて変更したのだと思われる。次に「日の光」という部分が原句の文法構造とは違う形で表現されている。こういう翻訳のメリットはとにかく英米人にとってわかりやすいということだろう。

ただしそのために失われるものも大きい。例えば若葉に落ちる日の光を見たのが何時のことなのか原句では示されていないのに反して、英訳では過去形が使われ感動が過去のものとして表現されている。

さらに問題なのは「私が見た」という表現によって、「私」という存在がその風景に対峙して前面に出てくるということであろう。それに反して原句では行為者を明示しないことによって、風景のなかに作者が自然に調和しているという感じを抱かせる。このように考えると俳句を翻訳するときに英語特有の文に置き換えることは、結局その特徴を損なってしまうのではないかと思われる。むしろ俳句特有の構造を残した翻訳のほうが英語には存在しなかった詩の形式を提供できるのではないだろうか。俳句が世界的に根強い支持を得ている理由は、上記のような翻訳ではなく、原句あるいは原句を尊重した一部の翻訳を通してその独自性が認識されてきたためだと考えられる。実際に次のように翻訳をすれば、英詩にはない特徴が際だってくるのがわかる。

Sun's glow upon  
Leaves green, young leaves——  
Ah, holiness.

このように短い主語述語のない詩は従来の英詩には見られなかったものである。主述を欠いた描写ゆえに、自分という存在は後退しそこに残るのは大自然から切り取った一幅の風景にすぎないように見える。しかしこの風景は単なる客観描写ではない。例えば 'holiness' という語は風景そのものに対する形容なのか、あるいはその風景を見ているものの感動の声であるのかが不明である。しかしこの不明さはいまいさではなく、むしろ芭蕉が意図したように、作者の感動が風景に投影されその風景と渾然一体になっているためだと解釈できるだろう。このように Haiku (俳句) においては風景と自我との間に微妙な調和が成立しているように思われる。

こうした Haiku の特徴をもう少し明確にするために、英詩との基本的な違いを考えてみたい。芭蕉は大自然をテーマに詠い、俳諧を新しい芸術に高めたという点で今なお揺るぎない影響力をもち続けているが、英国において最初に大自然を歌ったのがイギリス・ロマン派であった。芭蕉(1644-94)におくれること約百年余、イギリス・ロマン主義の詩人たちも同じように大自然に注目した。その中心的存在であったワーズワス(1770-1850)は次のように歌っている。

My heart leaps up when I behold  
A rainbow in the sky:

So was it when my life began;  
So is it now I am a man;  
So be it when I shall grow old,  
Or let me die!  
(‘My heart leaps up,’ ll.1-6)

ここでワーズワスは虹を見たときの感動を子供時代のみならず、大人の今も、そして老人になっても失いたくないと歌う。大自然とともにその生涯を送りたいとする詩人の強い願望が表現されている。大自然がこのように強い憧憬の対象になった背景には、産業革命によってロンドンが肥大化し多くの弊害が起きる一方で、人々の関心が山河に向かいその崇高美が発見されたことがあった。が、それ以上に大きな原因として挙げられるのは、当時の社会の激変に教会が対応できず、人々の不安に対してキリスト教が有効な処方せんを示せなかったことである。こういう状況の中でワーズワスは自らが生まれ育った大自然を崇高な存在とみなし、そこに絶対的な信頼を置くようになっていったのである。キリスト教の考え方では山河は本来人間の住めない荒地に過ぎなかったから、大自然をそのように神聖な存在とみなし帰依するのは画期的なことであった。イギリスの歴史において大自然が日本的な聖なる存在に最も近づいた時期でもあった。ところで上の詩に書かれたワーズワスの願いはかなったのであろうか。

興味深いことに、この詩を書いた数年後ワーズワスは次のような詩句を書き記している。

さらば孤独に生きる心よ  
人々から離れ、夢に住まう心よ。  
かくなる幸福はいずこにおいても哀れむべきもの  
盲目のものにすぎぬ。  
(‘Elegiac Stanzas,’ ll 53-56)

この詩においてワーズワスは大自然を精神的支柱としそこに安住することは結局社会的に孤独な生き方であるとして退け、キリスト教的不屈の精神を生き方の中心に据えるべきだと歌うのである。ワーズワスがこのように大自然崇拜からの転向を果たしたきっかけについては、さまざまな理由が考えられている。例えば弟の海での溺死事件、詩人として致命的な想像力枯渇などである。しかしながらここでは、「さらば孤独に生きる心よ」という言葉に注目してみたい。不可解なのは、なぜ大自然の中に生きることを孤独な生き方だと断定するに至ったのかというこ

とであろう。確かに隠者と同様人々から離れ社会的には孤立することには違いない。しかし大自然と一体になって生きることによって元々ワーズワスは人生の希望を見ていたはずなのである。それにもかかわらずその希望を自ら否定するような発言をするのはなぜなのであろうか。

その理由としてここで挙げたいのは、ワーズワスと大自然との関わり方に根本的な問題があったのではないかということである。大自然との一体感ないしは合一を望んだときにも、ワーズワスは自分という存在を小さなもの、大自然に比して取るに足らないものだと決して考えてはいなかった。虹の詩においても、虹という大自然の現象を前にして心を躍らせている「私」という存在がしっかりと表現されている。ワーズワスが望んだものは、大自然と自我とのせめぎ合いの中から生み出される一体感であり、想像力という激しい力の作用によって大自然と自分が1つになる至福を経験することであった。例えば「水仙」の詩においては、「内なる眼に水仙がひるがえり、私の心は喜びに満ち、水仙とともに踊る」と書き、想像力の強力な作用を暗示している。しかしながら、こうした理想の追求は想像力豊かな詩人へのみ許される孤独な戦いとならざるを得ない。しかもその想像力が少しでも枯渇したとたん大自然との合一の夢は絶たれてしまう。その結果、社会ともまた大自然とも融合できず、孤立する自分を見いだすことになる。ワーズワスが道半ばにして伝統的な宗教観を受け入れ、青春期の夢を自ら断った背景には、そのような問題が横たわっていたのである。ワーズワスのみならず、コールリッジやシェリーが失意を経験したその根本にはイギリス・ロマン主義が宿命論的にもっていた強烈な自我の存在があった。

そういうイギリス・ロマン派詩人たちの問題点を踏まえたとて、芭蕉の俳句を見るとき、そこに真っ先に見いだすのは自我の不在であろう。俳句が絵画的な客観描写のように見えるのも、そこから大自然に対峙するものとしての自我を消し去ったからに他ならない。

次のような芭蕉のHaikuを見てもそのことは明らかであろう。

Red and bright  
The pitiless sun

And yet the autumn wind.  
(あかあかと日はつれなくも秋の風)  
The sea darkens—  
A wild duck's call  
Dimly white.  
(海くれて鴨の声ほのかに白し)

ワーズワスのように動的な想像力によって大自然との一体感を得るのではなく、芭蕉はそこに自我を溶け込ませ捨て去ることによって大自然との合一を果たそうとしたのである。

また俳句において特異なのは、こうした大自然との合一を容易にする仕掛けがあることだろう。俳句が作り易い短い形式を持っていることもその1つで、英語でもほぼ17音節内外での翻訳が可能である。また俳句には季語がある。季語というのは大自然における時間の移り変わりを映したのことが多いから、これを俳句に読み込むことはそのまま悠久の大自然、時間と空間を超越した永遠なるものへの思いを読み込むことになる。俳句ないしはHaikuを作るものは芭蕉並みとはいかないまでもほぼ自動的に大自然との一体感を味わうことができるのである。

以上見てきたようにHaiku(俳句)はイギリス・ロマン派の詩人たちの作品と比較するとき自ずからその独自性が明らかになるといえる。ロマン派の詩人たちのように大自然を極度に神格化することもないし、曇りかけるような青春の動的な想像力もそこには見られない。そのうえ短いゆえに、世界観を系統だった筋道で歌うこともない。しかしながらHaiku(俳句)においてはだれでもその気になりさえすれば一句を詠めるという大衆的な面があるといえる。芭蕉の独自性はなによりも、だれもがしばらくは俗世間を離れて大自然のひとこまに自らを没入できる公式を完成させたことにあるのではないだろうか。想像力を武器にひとり英雄的な行為に及んだイギリス・ロマン派の詩人たちが結局挫折を余儀なくされたのとは異なり、Haiku(俳句)という詩のジャンルが今なお東西の人に実践されているという現実がなによりもそれを雄弁に物語っている。

注：芭蕉の3句は斉藤・Nelson 共訳。

(大阪外国語大学教授)